

ワクワクする 30 年後の植物科学と植物学会

東山哲也（名古屋大学／東京大学）

現在の大会で行っているような研究発表は、VR の普及により日常のなかで簡単に行えるようになる。大会は、わざわざ集まらなければならないイベントへと進化。「より地方や僻地へ!」、「より個人アピールの場へ!」と向かう。会員は、その年の「誘致合戦」に勝った市町村へ集結する（自治体の助成金によるサポートあり）。現地の植物にふれ、地野菜を食し、あらかじめ VR 発表で興味をもっていた会員と存分に研究について語らう。「**振り返ると、変革の原点は 2020 年の名古屋大会だった、自分も参加しておいて良かった**」と、しみじみ思う。植物学会の会務も、技術革新と制度改革で、もちろん大幅に軽減。

「全ゲノム解析、全ゲノム合成、細胞操作ロボットの技術が飛躍的に進歩し、生物は細胞として維持しなくても、いつでもデータベースの情報をもとに作り出せるようになる」、という世界が現実味を帯びる。生物学も社会も大きく変わり始めるが、植物は環境保全や農業応用への需要も高く、倫理的なハードルも比較的低いため、分野をリードするようになる。

宇宙生物学の挑戦が功を奏し、地球上の生物とは異なる起源、異なるシステムの生命体の発見が始まる。植物科学（特に植物学会）は、植物のみならず、バクテリア、原生生物、菌類までカバーしてきたことから、ノウハウをいかして、新たな多様性を理解する研究分野として発展する。その中で、火星から見つかった生物は、現存する地球上の生物と近いセントラルドグマは持つものの、独自の遺伝暗号をもち、新しいアミノ酸や分岐構造などをタンパク質に導入する論文が発表されはじめるなど、生物学が新たな時代に入る。新たな光合成システムをもつ「新植物」の発見や、数アミノ酸で強い蛍光を発するペプチド構造が発見され、新分野や新技術の開拓に、生物学分野は興奮に包まれる。

2020 年代まで日本の科学分野を閉塞感で覆っていた諸問題が解決し、「苦しい時代に研究を続けて良かった」と当時を振り返る。まず現在でも制度設計が進む、獲得した競争的資金の直接経費による「自己雇用」（給与の加算を含む）が一般的になり、優秀な研究者がポストで困ったり、Dual-Career に悩んだりといった状況は、比較的簡単に解決できるようになる。多様性向上の柱として女性研究者の増加をはかってきた植物学会をはじめとした植物科学分野は、成功した分野として注目を受ける。寄付金の税制や、研究機関の規制も大きく改善され、日本が真の科学技術立国として動き出す（某大学の理学部〇号館も建て替わって久しい）。好きな研究に没頭でき、経済的にも恵まれる「研究者」という職業は、中高生においても憧れの職業となり、増加した博士取得者が、日本の創造性、グローバリズム、伝統を様々な分野において支える形で、日本の幸福度を高め始める。様々な効果が日本全体に波及しはじめ、少子化にブレーキがかかり、明るく、長期的な安定の時代へと進む。